鬼来也

（下）

高木彬光

東京文藝社

続鬼来也

三九〇円

昭和三十九年三月十日印刷
昭和三十九年三月十五日発行

著作者　高木彬光
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

続
鬼
来
也

目次

仮寝の宿　五
飛鳥宮　三九
闇夜行路　六九
無双剣団　九五
蛇魂　一四四
激流　一六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

呉越同舟　一九〇
鬼は内　二一三
狂風図　二三六
魔炎　二五九
審判　二八二

装幀　村上　豊

仮寝の宿

夜ふけて――

駿河台の大久保屋敷の裏門近くに、小股の切れ上った粋な女があらわれた。

長兵衛の女房、牛若のお龍である。仇名のような身軽さで、退屈そうに門前を行ったり来たりしている目明しのそばに近寄ると、

「もし、兄さん、お前さんに頼みがあるけれど、聞いておくれじゃないかい」

と声をかけた。

「おお、姐さん、頼みってのはいってえ何だ。わたしゃお前にほの字で指は畳にのの字というわけなら、幸い明日一杯は非番だ。話の次第によっては、一晩しっぽりかわいがってやらねえでもねえぜ」

「ふっ、自惚れはいい加減にしておくれよ。江戸中男日照りがしているわけじゃあるまいし、お前さんはいったい鏡というものを見たことがあるのかい？　それで女が惚れるような御面相の持主だと思っているのかい？」

「お前はえらく口の悪い女だ。ところで、頼みとい

「ほんのしばらく、盲になっておもらい申したいの

「盲になれと？」

「そうだとも。実はこちらの殿様が三十日の閉門を仰せつかっていることは、お前さんも知っているだろうね」
「ふざけんねえ。そんなことは何も今さら手前からあらためて講釈されるまでもねえやな。そのために、こっちがこうして眠い眼をこすりながら、ここで張番してるんじゃあねえか」
「その殿様がまだお一人だということは、承知だろうね」
「そりゃあ、一人だか二人だか三人だか知らねえが、それもこちとらには関係がねえ」
「ところが大有りのこんこんちきさ。お前さんだって今の話しっぷりじゃあ、色恋の道にはまんざらの唐変木でもないようだから、わけを打ち明けて話すがねえ。実は柳橋の芸者で小染さんという売れっ子が、こっちの殿様に足駄をはいて首ったけという惚れこみ方でねえ。それを殿様の方も憎からず思って、三日にあげずお通いになっておられたんだけど、こんなことになっちまったもんだから、小染さんの心配しようといったらないのさ。手拭を持ち出しては首をつる、剃刀を持ち出しては喉を切る、三十日はおろか、七日も会えなければ生きてはいられないなんていい出すものだから、まわりのわたしたちがすっかり見かねてしまってねえ。何でも話の様子だと、殿様は田沼様のお憎しみを受けて、閉門のまま切腹をおおせつけられかねないような噂だし、それならせめて一夜なりとも、今生の名残りを惜しませてやりたいと思って、実はこうしてわたしがつれて来たのさ。ねえ、話というのはここのところだけれど、一つしばらく盲とつんぼと唖になって、中へ通してやっておくれじゃない

か？」
「ならねえ。それじゃあこっちの役がつとまらねえんだ」
「そうしゃっちょこばっちゃ曲がないけれど、そこはねえ。いいだろう」
何枚かの小判が、そっとお龍から相手の手に渡った。地獄の沙汰も金次第ということがあるから、とたんに目明しは相好を崩して、
「話はいいが明方までだぜ。一番鶏が鳴くまでには、きぬぎぬの別れも切り上げて貰おうぜ」
「そこはお前さん、わたしたちはそうするつもりだけれどもねえ。何とか話はつかないかい」
「これ以上無理を通せというのか？」
「そりゃあ、場合によってはねえ。小染さんだってもうこの屋敷を出るのはいやだといい出すかも知れないし、そうしたら、わたしたちだってせめてこれから何日か、殿様のおそばで名残りを惜しませてやりたくもなろうじゃないか」
「うむ、そりゃあもっともだ」
この目明しもちょっと小首をかしげながら、
「ただおれたちの方としちゃあ、あんまり出たり入ったりされちゃあ困るんだ。だから場合によっては、そうさな、おれは三日目ごとにこの裏門の張り番をすることになっているから、その間、出ないと約束をしてくれれば、それまで待ってもいい」

お龍は安心したように、三町ほど先で待っている長兵衛と早苗の方に近づいていった。

「鬼が……鬼が……鬼が来る……」

わずかの間に、まるで別人のように変ってしまった鬼雷斎が、眼を閉じたまま、何度かくりかえす譫言を聞いて、大久保彦四郎は深い溜息を洩らした。

いや、こうして寝ている鬼雷斎ばかりではなく、彼自身もああして閉門をいいわたされてからというものは、まるで人が変ってしまったようにやつれて見えた。

「殿様、殿様……早苗様がただ今お帰りでございます」

死んだように澱んで動かなかった邸内の空気を、初めてはずませたこの声に、彦四郎もはっと憂いにとざされた眉を上げた。

「おお、早苗、妹が帰ってまいったか？」

我を忘れたような足取りで、彦四郎はそのまま廊下から玄関へ出た。

家出娘がつれ戻されたように、お龍の背中にかくれてしょんぼりしている早苗を見つめ、

「帰って来たか。無事でよかった。ずいぶん心配していたぞ」

自分があれほど心配していたのに、なぜ許しも受けずに飛び出したのだというような叱責は、さすがに一言ももらさなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そうした言葉のやさしさが、かえって鋭く心をえぐったのか、早苗はぼろぼろと涙の滴をこぼしながら、

「申しわけございませぬ。兄上さまがあのようにお止めなさったのをおしきって、家を飛び出したあまり、一方ならぬ御心配をおかけいたしまして……」

「何をいう。そなたがわしの身を気づかって、そなたなりに、何かの方法をとろうとした心の中はわかっている……その方法の如何は知らず、その心にはわしも何と礼を申してよいかわからぬくらいなのだ……とにかく、話は上って聞くことにしよう。これは、牛若の御内儀、そなたにも苦労をかけてすまなかったな」

顔をそむけてもらい泣きをしていたお龍も、とたんに鼻をすすり上げながら、

「殿様やお嬢様の御苦労、御心痛にくらべましたなら、わたくしどものしておりますことなどは、物の数にも入りませんくらいでございます」

と答えた。

「さあ、二人ともまず上れ。こんな所で長話もなるまい」

彦四郎は二人をつれて書院へ帰ると、床柱を背に腕を組んだ。お龍はその前に、小さな包みを差し出して、

「長兵衛はついそこまで送って参りましたが、お屋敷へ入りこむためにはいろいろ作戦もございまし

て、お目通りも出来ないのが何よりも残念だと申しております。それからこれは平賀源内先生のところからおとどけ頂きましたお薬でございますが、急の乱心、錯乱には大変効き目があるそうでございますから、鬼雷様にさしあげて下さるようにと申しておられました」

「いろいろと御配慮痛み入る」

彦四郎は長兵衛や源内が前にいるように軽く頭を下げると、

「ところで早苗、そなたはいったいどこへ参っていたのだ？」

「なるほどな……不思議なこともあるものだ。このわずか一日の間に、それほど奇怪なことばかり続けて起っていたとは思わなかったが」

早苗とお龍がこもごも物語る話を聞いて、彦四郎がすっかり考え込んでしまったのも、少しも無理のないことだった。

確かに、早苗が屋敷を抜け出してから、また立ち戻ってくるまでに、事件は実に意外な方向に発展し、予測も出来ないような異常な動きを示したのである。

「鬼来也という曲者にも、少しは礼もいわずばなるまい。そなたが操を汚さずにすんだのが、彼のせいだとなってくると……」

「でも、それも向うの身になって考えれば、あたりまえかも知れません。もし、わたくしがあの場で

手ごめにあうようなことがありましたならば、わたくしとしても、この屋敷へ帰って兄上様のお顔を見ることは思いもよりませんでした。そうすれば、むこうも狙った駒を手に入れられず、痛しかゆしでございましたでしょう」

「そうかも知れぬな。あのような血も涙もない怪物に、人の情を望むのは、こちらが間違っておるのだろう。珍らしい親切と見える行動も、むこうとしては算盤玉をはじいた上の勘定ずくに違いあるまい。が、それにしても……」

彦四郎はその時、ふいと何かに気がついたようだった。長押しにかかった槍を見上げて、

「そうだったのか。そうなのか」

とひとりごとのようにつぶやいていたが、今度は鋭くお龍を見つめて、

「お龍、そなたは妹を柳橋の芸者小染ということにして、この屋敷へつれて来てくれたのだな。夜の明けぬうちにつれ戻るという約束だといったな？」

「はい、それはその通りでございますが、それは一時の逃げ口上でございます。わたし一人が戻ったところで、袖の下をたんまり握らせておいた手前、むこうは何とも申しますまい。何だったら、この次の張り番の時まで、三日の間は逗留させてもいいような話はつけて参りましたし、そこはもう一度、わたくしが帰り際にうまく言いくるめてお目にかけましょう」

「いや、そのようなことを心配しているのではない。もう一度、芸者の小染として、この屋敷からつ

れ出して貰いたい人間があるのだ」
「それはどなたでございます？」
「わしだ」
早苗とお龍は顔を見合せて、
「兄上様、それはなりませぬ」
「殿様、どうぞ御短気は」
と口を揃えて叫んだ。
だが、彦四郎は沈痛な調子で、
「そなたたち二人の申すことはよくわかる。わしも決して死に急ぎ、功をあせるというわけではない。ただ、いまの話を聞いておると、事は至極緊迫して来たようだ。長兵衛、三之丞、そなたたちが必死に働いてくれたことは涙が出るほど嬉しいが、あの怪物はどう考えても、余人の手にはあまるようだ。ことに、いまの話を聞いているうちに、わしにはふと思いついたことがある。恐らく、この狙いは外れてはおるまい。あわよくば、一挙に鬼来也の正体をあばき、あの駒を我が手に取り戻して、田沼殿にも一泡吹かせて見せられようが……」
裏門を細目に開けて、あたりの様子をうかがいながら、お龍はそっと外へすべり出た。そのとたん

に、闇からぬーっと、牛のようにあらわれた目明しが、
「お前一人か？　あの女は三日の間屋敷へ残るのか？」
「まあ、びっくりするじゃあないか」
お龍も軽くしなを作って笑った。
「いま殿様と御対面させたところがねえ、殿様も涙を流して喜ばれて、しばらくは二人とも声が出ないような始末なのさ。ただ、殿様のおっしゃるには、閉門謹慎中の身として、芸者を屋敷に引き入れているなどということがわかれば、その身はたちまち切腹――ということになる。そなたの心ざしは嬉しいが、今夜は夜が明けぬうちに帰って貰おうということになったんだよ。でもねえ、そこはわたしたちが気をきかして、裏門にはこういう物わかりのいい番人がついているんだから、せめて夜が白白としらむころまで、とおすすめしてきたんだよ。そこの所は心得ているだろうね」
「わかった。いや、せっかくお前に頼まれて、気をきかしてやったのはいいが、このまま何日か逗留されちゃあ、やっぱり困ると思っていたんだ」
「そういうわけで、もうちょっとの間、眼をつぶっていておくんなさいな。せっかくのお役目御苦労だと思って、この通りお酒を用意して来たからね。毒見はわたしがつとめるから、安心して飲んでおくんなさいよ」
と、屋敷の中から仲間に持たせて来た角樽を相手の眼の前につきつけた。

「すまねえな。姐さんはやっぱり苦労人だぜ。気のきき方が違ってらあ。それじゃあ有難く御馳走になるぜ」

この目明しはよほどの飲ん平らしく、もうぐびぐびと喉を鳴らして、お龍の毒見するのを待ちかねているような様子だった。

子分らしい男を二三人、呼子の笛で集めて舌鼓をうちだしたのを見て、お龍はちょっとその場を離れた。

「どうした？　芝居はうまくいったかな？」

やはりこの笛の音を聞きつけて、何か変事があったのかと思って近寄って来たのだろう。弁慶の長兵衛はこの場に近づいて来て、お龍の耳に口を寄せた。

「まあ、一応はおさめる所へおさめたがねえ。ただ……」

「そんなら何も気にするこたあねえだろう。それでこっちはお役御免だ。やつらが飲んでいるうちに、二人でどろんと消えりゃあいいじゃあねえか」

「それがねえ。お前さん、そうは問屋が卸さないんだよ」

「どこの問屋だ？」

「実はね、殿様が女に化けて、お嬢様と入れ違いに、お屋敷からぬけ出そうとそうおっしゃるのさ」

「何だって！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com